

元号寺シリーズ(その4)

建長寺(臨済宗建長寺派大本山・神奈川県鎌倉市)

開山蘭溪道隆禅師は、寛元4年(1246年)33歳で来朝し、建長5年(1253年)に創建されたのが、日本最初の『禅寺』と称した中国宋朝風の臨済禅だけを修行する専門道場の建長寺です。

禅の教えに深く帰依していた鎌倉幕府5代執権・北条時頼が開基されました。正式な寺号は、建長興国禅寺。この頃は承久の乱(1221年)を経て北条氏の権力基盤が安定し、京都にある朝廷の全国支配は弱まっていた。

元号寺の許しを容易に得られたことは、当時の北条氏の権勢を物語っています。

建長寺が最も盛んだったころの様子は、僧侶約1000人、寺領も膨大で末寺も400以上、塔頭49院を数えました。

しかし荘厳な伽藍をかまえた建長寺も、永い歴史を刻む間、たびたびの罹災で古い建物はことごとく焼失し、被災に見舞われながらも、鎌倉幕府の強力な支援のもとに相應の復興をみていたが、大檀那である北条氏(鎌倉幕府)が元弘3年(1333年)に滅亡すると大きな痛手となったようです。



建長寺の天下門



建長寺の法堂



建長寺の三門(国重要文化財)



善教寺本堂にて護持会役員会を開催

定いたしました。
八月の盂蘭盆会法要、九月の秋季彼岸会は、お齋を出さず午前中のみ法要を勤めてまいりましたので、報恩講も午前中だけでもと念願しておりましたが、残念であります。
親鸞聖人様に申し訳なく思いますが、微笑みたくて、お許し下さることでしょう。

住職レター

秋も深まってきました。例年ですと、報恩講シリーズも真つ盛りで、各門徒宅へ参勤し、そして各地区(講中)でのお寄り講を勤め、そしてその集大成である、寺での報恩講となります。昔は、報恩講は各家のお祭りの如く、親鸞聖人の法事を盛大に勤められていたのでしょうか。今では、「報恩講って何?」「勤めんといけんの?」と、聞かれるようになりました。
寺の本堂で勤まる報恩講は、年間を通じて大きな区切りのような法要です。勤まるのが当たり前、当然勤めるもの、それが報恩講であります。しかし、コロナ禍で、全てが変わりました。

護持会役員会を開催し、報恩講を例年通り開催するか?取り止めとするか?、協議の末に言われた意見は、法要は今年だけではない来年も再来年も続く、冬にかけて新規感染者が増える、参拝する方は高齢者が多い、寒い時は換気が十分行えない、等々でありまして、法要の取り止めを決